
ショートショートすと〜り〜ず【 捧 】

水瀬愁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ショートショートすと〜り〜ず【 捧 】

【コード】

N7956C

【作者名】

水瀬愁

【あらすじ】

天才と例えられるほどの実力を持つ男子学生と、一人の女子学生の、ピアノの話。中学生から高校生になること いろんな道を歩く上で、別の道に行くことになるのは仕方ないことだろうけど、それでも……

(前書き)

長編にしようと練っていたものを掌編に変更っていう裏事情。
作品出演の方々は中学生ですのでご注意ください。
あえていいでしょう。キザは嫌いです。

ショートショートすと〜り〜ず【 捧 】

感動させる事は、あまりにも重い

そつと、丁寧に鍵盤をしまつ。

乱暴に扱えば傷ができたりして、次に使う人が心苦しく思つてしまつたらうから。

今日も僕は、たくさんの音を綺麗に響かせてくれたピアノにありがとつという言葉を送る。

傍に落としておいたカバンを拾うよりはやく、ひとつの拍手が鼓膜を奮わせた。

振り返る。

音楽室にはありきたりな、良し悪しの分かれやすい個性ある机やイスの群。それよりも手前に、彼女はいつもどおりの立ち位置で小さくも盛大な拍手を喝采していた。

「……いつ聴いても、すらすらだよね。嫉妬しちゃう」

「美弥ちゃんも上手だよ。僕はちよつと、豊富なだけだ」

ブレザー着た女の子。スカートが短いのは流行か何かだろう。あまり気にはしていない。そう、いつもどおり、気にはしていない。

カバンを拾い、歩き出そうとした。

まだ話したそつな美弥を視界に入れ直し 言葉を交わすまでもなく僕が折れる。

勝つたことはない。勝つつもりがないだけ。

近くから木のイスを持ってきて、美弥を促す。

自分は、ピアノとセットの、黒い長方形の四足イスへと腰を下ろした。

美弥はすぐさまねえねえと尋ねて来る。

「本当の本当に、グレードテストの級持つてないの？」

「ん……………何度も言ってるけどさ、持ってないよ」

グレードテストってのはピアノの級で、六級くらいから講師資格を取るためのテストを受けられるようになる……………だったか。

美弥は納得いかないという風に、唇をアヒルみたいにする。

「御影君だったら、歴史に名を残せるくらいの偉人になれるって思うんだけどなあ……………」

そこまでいかないとは、思う。

自分のことだから、肯定するのは間違っているだろうから、曖昧に笑っておいた。

そして、いつもどおり僕の番が回ってくる。

いうことは同じ。

「僕は、たくさんの人を感動させたりできるほど、寛大な心を持つてるつもりはないから。

荷が勝ちすぎるからさ……………いつか潰れちゃうんじゃないかって思えて、恐くて仕方がなくて、だから独学で自分が楽しむためだけにやってるんだよ」

「……………そんなに弱い風にみえない。っというより、絶対私よりも強い」

いつもと同じく唇を尖らせた美弥。

そう、いつもどおり　ここまでは。

少し遠くにある窓から、外を見る。

そろそろ雪が降り始める季節。あと少しもすれば、三年間という時間を過ごしたこの中学校と　美弥とも、お別れになる。

美弥は音楽学校に行くといっていた。僕は普通の公立高校。今みたいに会うことも極限にまで減ってしまう。あと数十回しかこの時間は来ない。

多いようで……………一生からみれば、とても少ない残りの時間。

僕は、決めた心を秘めていた。

乾く口内。構いはしない。でも声がかすれたら困るから、ゆっくりと呟く。

「……美弥ちゃんがいてくれるなら、きっと僕はどこまでも行けると思う」

この台詞を聞いたのは、何の映画だったか。
自分の言葉で表せないのが悔しい。

我ながらこそばゆい台詞。率直に『好き』と伝えられるほど、僕の心は断固でも頑固でもない。

……遠まわしなキザ台詞を吐くほうが勇気がある気もするが、気にははいけないはずだ。

美弥ちゃんはキョトンと目を瞬かせて 凄いくらいの反応を返してくれた。

「え、いや、その……いやじゃないんだけど、さ……えっと、な、な、何、どういう意図、っていうかあの、ええっと……」

要領がつかめずに垂れ流すくらいなら、黙っていたほうが良いだろうな。

僕はそう思って いや、そう言い訳して、美弥を黙らせる。
必然的に黙ってしまうのは、僕もだけど。

「……………」

嫌じゃない静寂。やっぱり息苦しくなってこちらから離れる。

永遠にできるなんてこと、やっぱりあるはずがないんだと痛感。

美弥は落ち着いたのか、それとも完全にパンクしたのか、顔を真赤にしてちらちらと僕を窺っている。

美弥が熱いからだ。そのせいで 僕の頬も、焼けるくらいに熱いんだ。

そういうことにしておく。伝えたいことは伝えた。立ち上がり、歩き出そうとして……

「……………でも、でもさ」

美弥の呟きを、淡くてかすかで、ちゃんとした響きのもった囁きを。

「できたら……御影君の音は、私だけのものにしてほしいな。なん

て

耳で、心で、受け止めて。

ああ、そうか。と思う。

きつと、美弥の気持ちと僕の気持ちは今 同じなんだ。

僕の知らないことを、美弥は知っていた。やっぱり美弥は僕よりも強い。ずっと強い。

「……そうだね。うん、そのとおりだから、決める。」

僕は、自らの手を見下ろした。

天才と呼ばれる実力がこの手に宿っている。その道に行く誰も羨むものが、僕の手には秘められている。

「僕の奏でる音のすべてを……美弥ちゃんに捧げるよ」

たった一人の人間の心に感動を生むための、素晴らしい使い方しよう。

自分よりもしどろもどろで真赤な美弥ちゃん。

やっぱり……美弥の熱気に当てられるから、こんなにも頬が熱いんだ。

うん、そういうことにしておこう。

未だ落ち着き無くなにやら呟いている美弥を見て、あと少しだけ、と思う。

キザな言葉を言ってしまうほどに 僕は美弥に溺れているだろうから。

あと少しだけ。数年だけでいいから、こんな時間を増やしていきたい。

美弥への愛は、本物だから。

たくさんの人を感動させられる音のすべてを、愛する君だけに送る

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7956c/>

ショートショートすと〜り〜ず【 捧 】

2009年7月3日19時04分発行